法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

伊礼本『念仏集』 : 解説と本文

池宮, 正治 / IKEMIYA, Masaharu

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究
(巻 / Volume)
18
(開始ページ / Start Page)
351
(終了ページ / End Page)
379
(発行年 / Year)
1992-03-25
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002750

Hosei University Repository

伊礼本『念仏集』—解説と本文

池宮正治

1　成立と筆者

本資料を筆者（池宮）が知ったのは、一九九〇年九月琉球列島の祝福芸であるチョンダラー詞章とニンブチャーの念仏歌謡をまとめた『沖縄の遊行芸—チョンダラーとニンブチャー』を出版した直後のことである。同資料の複写本を沖縄市史編集室の資料から見出し、九一年十月原資料を所有者伊礼信一氏宅で調査した。

本資料は、美濃紙の半紙を折り曲げた表紙一枚、遊び紙一枚、本文一二枚からなっている。表紙には中央に「念仏集」とあり、右に「明治二拾八年　光緒一拾一年乙未」、左下に「伊礼信二郎」とあ

Hosei University Repository

り、明治二八（一八九五）年に成立したことが知られる。光緒一一年というのはその中国年号である。本書は縦二六・四㌢、横一九・〇㌢、表紙以外は赤い罫線が引かれている。

伊礼信二郎はその筆者である。沖縄市（旧越来村）上地に在住し主に教育畑で活躍した人で、明治二（一八六九）年一月五日生まれ、昭和四四（一九六九）年八月一一日、数え一〇二才の長寿をもって亡くなっている。

従来念仏歌は、琉球大学伊波普猷文庫所蔵の、「同治十一年」（一八七二年）の筆写年を有する「念仏集」がもっとも古いが、これには「親の御恩」「ま、親」「天神世界」「梅のだんぎ」「あの経」「春咲花」「ちやうじやの流」の七編が収録されていて、この系統は、県史編纂資料として大正三、四年頃首里小学校から提出された「念仏歌」や、山内盛彬の『琉球王朝古謡秘曲の研究』所収の念仏歌もほぼこれを踏襲したものであることが分かっている（「沖縄の遊行芸」）。本資料がこれに次ぐまとまった念仏歌集である上に、その七編をすべて含んでいること、それらがすべて子細な点でこれを補うことができることなど、研究の上で大変有益である。

本資料の採録編集の動機や背景については本人が亡くなっていることもあり、今となっては推量する手掛かりもないが、明治二六年に来琉しておもろ研究に従事した田島利三郎筆写旧蔵の、沖縄本島中北部のウムイ（おもろ）を集めた「語学材料第十九」には「明治二十八年取調／各間切のろくもいがおもろ」とあり、またその末尾には明治二四年四月四日付の、勝連間切地頭代山城山戸から中頭役

所長西常央宛の文書もある。つまり、琉球の文化に深い関心と愛情持っていた西が、この時期各間切にこうしたものを収集して上申することを命じている。県庁に「琉球資料」五十巻余が設置されたのもこの時期で、丸岡莞爾知事のときである。また西がチェンバレンや笹森儀助といった来琉の研究者や知識人に資料を提供したこともよくしられている。こうして西が職権で集めたものは、たまたま田島の資料の中にウムイ（おもろ）だけが残されているが、実はもっと幅広く収集していて、その中からウムイ（おもろ）だけを田島が写したのだと考えると、今回の念仏歌は越来間切の教育関係機関にいたという伊礼信二郎がその要請（命令）に答えてまとめたものと考えることができる。

右の事情からするとこの念仏歌も地域で歌われていたと考えるのが妥当だが、本人が直接採録したのか、それともあらかじめ書写されたものを写したのか、といった点確かなことはわからない。本文は誤字・当て字・衍入・脱字などが多く見られ、これは本念仏集の前にテキストがあったように思われる。というのは耳からの採録だともっと発音に近い表記になったはずで、そうなっていないというのは、書写したからではないかと推測される。

何れにしても地域の念仏歌を採録するとなるとニンブチャーに接触しないわけにはいかない。このあたりの胡屋前（グヤヌメー）といわれる集落内に、大正期結髪をした大城（ウフグシク）ニンブーといわれる人がいて、念仏を唱え鉦を叩いて葬式に加わっていた（「沖縄の遊行芸」雑誌「どるめん」二〇号　一九七九年二月、前掲『沖縄の遊行芸』所収）。首里のチョンダラー・ニンブチャーのよう

Hosei University Repository

に軽蔑差別されるようなこともなく、通婚も自由だったという。これまで紹介された宮良当壮の『沖縄の人形芝居』以来、乞食遊行の被差別の側面が強調されてきているが、それは都市の首里のチョンダラー・ニンブチャーのことであって、意外にも地方のニンブチャーはそうでもなかったらしい。新城敏男は八重山の例として「(念仏)鉦を打つ人をニンブジャー(念仏者)とよんだが、それは部落ごとに指定され、公的な役割を担っていた。そのためいくつかの村では、村有地に念仏田が設定されていたが、知っている人々も次第に少なくなりつつある」(落ち穂欄「ニンブジャーとエイサー」琉球新報一九九一年八月二九日)と述べている。こうした報告をこれまでまったく聞かないが、これが本当なら当然琉球全域でもこうしたことがあったはずで、沖縄本島中部の越来村(現在沖縄市)の大城ニンブーが身分を隠すどころか旧時代の誇りを誇示して断髪しなかったのもうなずけるし、新城の報告はこれを裏付けるものである。この人のもとに一種のメモランダムとして念仏歌が収集されていたことが充分考えられる。念仏歌は口承文芸である。したがって詞章が時代が経過するにしたがって変化することはやむおえない。本念仏歌にもそのことが伺える。だからこそ多くの詞章を収集しなければならないし今回の「念仏集」が貴重な所以である。

2 内容

表題に「念仏集」とあるように念仏歌謡が一三編収められている。その中「歌念仏」「拾三仏」「十

時念仏」の三編は本書にしか見られないもので、本書の価値を高めている。なかでも「歌念仏」は和歌で他に例のないものである。言うまでもないが、念仏歌は八・五音の連続、その八音も内部は四四音になっているという特徴的な詞形を持っている。その上和歌そのものの口承伝承も琉球列島では皆無なのだから、和歌の念仏歌が如何に珍しいものであるか、説明するまでもあるまい。そればかりではなく、対応する念仏歌を有する既存のものについても、これまでのものとは異なるところがあって、念仏歌の詞章やその理解に大いに参考になる。

所収の各詞章の特徴を若干紹介しておく。

「山伏の流」—宮良当壮の『沖縄の人形芝居』所収の「ヤマブシ(山伏)」や沖縄県史編纂資料所収の「山武士」(『沖縄の遊行芸』所収)とあるものに相当するものである。しかし「—流」とあるのはこれだけである。「流れ」というと、本土近世歌謡の叙事的な歌謡によく見られるもので、奄美に「芭蕉流れ」があるものの、沖縄の唯一の例である念仏歌謡の一つ「長者の流れ」(尊者の流れ、仲順流れともいう)は、冒頭「仲順流れは七流れ」とあるものがそのまま題となったもので、「流れ」歌ではない。従ってこの一例だけではたしてもともと「流れ」が付いていたかどうか、疑問が残る。

歌の粗筋である、編笠を被り、杖を点き、念仏鉦を肘に掛け、撞木を持って一夜の宿を過ごしがたく難渋する僧(乞食)の気の毒な境涯を歌う点では右の歌と共通しているが、詳細では、い

Hosei University Repository

ちいち指摘しないが、相当に相違が見られる。

「親の御恩」―沖縄全域に広く伝承されていた念仏歌である。詞章はもっとも古い同治の「念仏集」や県史編纂資料の「親の御恩」と若干順序が違うところがあるだけで、詞章、分量とも大体同じである。

「継親念仏」―これもだいたい右の事情と同じだが、末尾二行「あくの段々よみはたち／我身の命のよしまらぬ」は、「まゝ親へいらへのならぬしよて」の次にある。また「蝶になて来て請取ひ」はないし、後ろから三行目の「沖にし」は「大にし」になっている。

「天神世界」―これも上の資料とだいたい変わったところは少ないが、二〇行二一行「てた城てたははんたに下ていく／おさねとりしち行れとも」は他にないユニークなもの。「来るは七月中の十四日」の「来る」は「頃は」の当て字であるが、「七月中の十四日」はふつうは「七月中の十日」となっているところで、意味からみれば「七月」ともいうお盆は、十三日から十五日までが主だから、「中の十日」よりも「中の十四日」の方が分かりやすい。「十四日」をトゥーユカと読み、これがトゥカに変化したと考えられる。三十一行目の「敷瓦」は同治の「念仏集」以下「散飛」となっているが、つぎに「はめて」となっているので「敷瓦」がよい。少なくとも分かりやすい。題名の「天神世界」は他に「天じん世界」「天じん四界」ともあって、実のところよく分かっていない。和讃雑集に「馬鳴龍樹と天神と、皆是浄土を期し玉ふ」とある「天神」か、それとも欲

界色界の天上にすむ天人をテンニンと読んだか。

「梅のたんき」―微細な相違を除けば上とまったく同じ。一二行目の「我が子は訓よる人をらば」と珍しい訓字を使ったまったく同じ章句が同治本にもあり、広い意味で同系統の写本（テキスト）があったことが予想される。題名は初句「梅のだんぎに花ぐらん」から来ている。「だんぎ」は談義で、仏教による説教や教誡のこと。「花ぐらん」は「花ぐだん」とも書いてあり「ぐだん」は講談から出たものであろう。別に「女だんぎ」「花ぐだん」という念仏歌もある。寛永二（一六六二）年の令達に「侍町人に至るまで人を集め、仏説の講談かつて無用たるべく候、殊更出家として俗家に入り談議申すまじく候、況んや風俗として軽々しき仏法沙汰の限りに候」（『沖縄仏教史』）と僧侶が民間に入り、「講談」「談議」して仏教の布教をすることを禁じている。

「あの経」―これも章句・順序・分量ともだいたい同じだが、二五行目（後ろから三行目）の「わかりもさま〳〵思のとも」は、同治本には「七□たおもひとも」、県史編纂資料には「七度たおもひども（甲斐はなし）」とある。同治本では読めない箇所と脱字があるらしいし、県史編纂資料は「甲斐はなし」を補ってあるが「七度た」の「た」は衍入であろう。伊礼本念仏集の「思のとも」も「思へども」の誤写である。が「別れも様々思えども」を写したことは理解できる。

題名の「あの経」は本文五行目の「あの経」から出たものである。「阿の経」と書いてるものもある。「阿含経」の意か。阿含経は仏教として伝承された聖教の総称である。

Hosei University Repository

「春咲花」―これも殆ど同じ。五、六行目「千年もさかよる末代も／下葉は紅葉ぢて枯ていく」は同治本「子年と成□よる末代も／下葉は枯ていく」とあって、読めない箇所と「紅葉」の脱字を認めることができる。

「ちやうしやの流」―この念仏歌も順番・詞章ともよく似ているが、五行目の「後生よにひかれて面白や」は、同治本の読めない箇所を明らかにできる。一〇行目、同治本「かとりくさ」の「くさ」、三四行目も「王の手箱をふりあけて」の「ふりあけて」を欠いているがこれで補える。三九行「あひちに焦りてうけなわち」は「よひかい集焦かや□□□なわち」とあって読めなかったが、意味は分からないものの読めるようになっている。伊礼本には一四行の次にある「其子は野原にすて置て／弐人の親のあとを取る」の二句を欠いている。また伊礼本には末尾に「弐代続じ三代にちやうじやになる／此よて拝も人計」とある。

この念仏歌は二十四孝の郭巨や唐夫人の物語や昔話の「子供の肝」それに長者の流れや仲順大主説話等が習合したものであることをすでに述べたことがある（「『仲順流』の劇化」『沖縄の遊行芸』）。長者系の歌は例えば『俚謡集』所収の福岡県の「長者四せつ」には、

長者さま〳〵おほけれど
みなみつ長者と申するは
いとな長者でおはします

大ぢに黄金をゆりはめて
白銀はやしを七はやし
こがねの御蔵が七みくら
四方に四せつをあらはせり
東をはるかにながむれば
春の景色とうち見えて
日月はんじやうかゞやかに
誠の春とは見えにけり　〳〵
南をはるかにながむれば
夏のけしきとうち見えて
池水までもぬるうして
みいとのかまどをみがきたて
誠の夏は見えにけり　〳〵
西をはるかに眺むれば
秋の景気とうち見えて
十二のぼさつをまゐらする

Hosei University Repository

誠の秋とは見えにけり　〈
北を遙かに眺むれば
冬の景色とうちみえて
白かねついぢをおつきやる
ついぢのうへにまつ植ゑて
松に白ゆきふりかゝる
誠に冬のけしきとは見えにけり　〈

とある。沖縄の「ちやうじやの流」は、もともとはこの「長者四せつ」のように、正月に各家を訪問して祝言を述べ歩く万歳などの祝福芸を伴うものだったに相違ない。今はいちいちの章句の理解も難しくなっているが、「長者四せつ」を見ればおおかたの見当はつくであろう。すくなくとも「ちやうじやの流」の十行あたりまではかつてのそうした祝福芸の面影が残存している。

正月を中心に出てくる祝福芸を我々はチョンダラーといっている。とすると、「ちやうじやの流」のように、かつて祝福芸の歌謡であっても、これに二十四孝の郭巨や唐夫人などの孝行話を注入してこれを七五調に近い念仏歌謡の特徴である八（四四）五調に仕立てたものであった。言い換えるとチョンダラー歌謡からニンブチャー歌謡へ移ったものともいえる。

「歌念仏」―和歌が八首。先に述べたように和歌の念仏歌はここの例しかない。誤字脱字読めない箇

所も多い。とにかく珍しいものである。影響関係など他の資料との突き合わせなどはまだしていない。八首目の「鳥野辺」は「鳥辺野」の誤りか。「鳥辺野」と言うのは京都東山西麓一体に平安時代からあった墓所・荼毘所で、多くは「鳥辺山谷の煙りの燃えたたばはかなく見えし我と知らなむ」（拾遺集・哀傷・読み人知らず）のように火葬場として歌われる。しかし「鳥辺山思ひやるこそ悲しけれひとりや苔の下に朽ちなむ」（千載集・哀傷・成範）と土葬を歌ったものもある。八首目の一首の意味は、鳥辺野で犬が死体を争う声を聞くと我身を食われるようで、身の置きどころがない、というもの。

「親の御普提」―宮良当壮の『沖縄の人形芝居』では「ジョールシューガグブラン（浄土宗が孝諭）」、沖縄県史編纂資料と山内盛彬の『琉球王朝古謡秘曲の研究』では「親のぐぶだん」、八重山地方では「グブダン念仏」「グブダイ念仏」「コーフダイの歌」「大和念仏」などと呼ばれているものである。これらの言葉は宮良が「孝諭」としただけで他に提案した人がいないが、これらの「グブラン」「グブダン」「グブダイ」「コーフダイ」は、もともとは「御菩提」である。これがゴボダイ―グブダイと変化したものである。これらの念仏歌で、県史編纂資料と「古謡秘曲」の念仏はよく似ているが、この「親の御普提」はどの念仏歌とも近しい関係にはない。

「親念仏」―沖縄県史編纂資料と山内盛彬の『琉球王朝古謡秘曲の研究』所収の「親しぐん」に相当するものである。しかし詞章は相当に相違している。「親しぐん」の「しぐん」も分っていない

Hosei University Repository

ので、大胆に提案しておくと「せうこん（招魂）」から来たか。死んだ親を思い出して悲しむ内容になっている。

「十時念仏」―「壱時にはひとり生まれてひとり行く」のように尻取り式に十時まで歌ったものである。また「何時には」以下が七五・七五になっているのも特徴で、沖縄でこの念仏歌がこれまでまったく採録されていない。本土渡来のものであろう。

「拾三仏」―袋中の「琉球神道記」巻四に「十三仏ノ種ヲ云バ……不動、釈迦、文殊、普賢、地蔵、弥勒、薬師、観音、勢至、弥陀、阿閦、大日、虚空蔵」とある。江戸時代には毎月十八日の朝には観音に、八日の夕は薬師にお参りする習慣があり、それを「朝観音に夕薬師」といった。しかしこうしたことが沖縄に入っていた形跡がない。

十三編のうち「親の御恩」から「ちやうじやの流」までの七編は、同治本「念仏集」と順序や量、詞句までもよく似ているが、県史編纂資料や山内の前掲書ほどではない。しかし近い関係であって、同治本とは異なるもののこれに近い系統のテキストがあったことが分かる。「山伏の流」「親の御普提」「親念仏」などはどれともこれまでのテキストとは遠い関係にある。またすでに繰り返し述べたように「歌念仏」「十時念仏」「拾三仏」はこの本にしか見られない和歌や七五調の歌で、本土渡来の歌謡であるらしいことがうかがえ、念仏歌謡を豊かにしていると同時に、影響関係や原拠を含めて新

たな課題を提出している。

凡例

一 忠実に再現することにつとめたが、韻文（八・五音）について適宜行を分った。
一 漢字は原則として新漢字とした。
一 底本の脱字と思われる箇所については、括弧（　）に入れてしめした。
一 底本の誤字と思われるものについては、右かたに括弧（　）に入れてしめした。
一 底本に誤入と思われる文字は、括弧（衍）で示した。
一 整理上の便宜のために番号を付した。
一 底本は縦べた書きになっていて、念仏歌の特徴である八・五音ごとに◎印がついている。翻字のさいはこれを参考にして句切ってある。
一 和歌の「歌念仏」は上下の二行にした。
一 濁点は底本どおりに復元した。

Hosei University Repository

念仏集

山伏の流　親の御恩
継親念仏　天神世界
梅のだんぎ　あの経
春咲花　ちやうじやの流
歌念仏　親の御普提
親念仏　十時念仏
拾三仏

但仏之名◎薬師　◎観音　◎地蔵　◎不動　◎釈迦　◎文珠　◎普賢　◎勢至　◎弥勒　◎阿弥陀　◎阿閦　◎大日　◎虚空蔵

1　山伏の流

駒乗り出たる山伏の
小網の笠をばつちにかめ
無常の笠は竹にかけ
阿（弥）陀の掛落を首にかけ
百八珠数をば腕に貫き
あしろのはきをば首にかけ
念仏金をばひぢにかけ
金のしぶくはかた手持
七節竹をば杖とつき
竹の七節経をくめて
あの村たとよて宿かりは
子人の一人差出て
此村山伏宿ならぬ
水のこゝろのかたくして
薪木のこゝろの続くして
其時山伏歌よもに
世界に照れる御月ても

かつらの男の宿とより
風（に）もまれるさじ竹に
雀の小鳥の宿とより
是に踏れるしば草に
螢の小虫の宿とより
波によらりるさく草に
千鳥の小鳥の宿とより
哀りや山伏宿とらぬ
一夜の宿をとりかねて
破りた寺に宿とりば
よるの夜中に時雨有る
衣は短かしよるは流し
竹とて引ばすゝがてる
すゝとて引は肩が出る
いつか此夜あけれかな
大和の諸国に差出て

Hosei University Repository

此事かたりて慰ひ
京の町までひるめらひ

2　親の御恩

親の御恩は深きもの
父くが御恩はうみ深き
母くが御恩は山深き
昼は父くが足の上に
扇子の風にあふがれて
夜は母くが懐に
ぬりたるかたには母が寝て
乾く方には子はねせて
もるこし濡れば胸の上に
是程親に思わりて
拾よへや廿ちやたよりとも
親の御恩はまたしらぬ

切て見てこそ憐り知り
我が親姿を拝まよて
夜立があければしらぢに待ち
ひもとの下りばかとに立
我か親待りとも待兼て
あさぎの浜迄行見りば
さるしぎぬりたる墓印
あふしけ山（を）押分て
其夜は墓屋に宿とりて
其夜の夜中に夢拝て
おそ見て探りば親はなし
父呼て母よて声そりば
声有ものは山ひゝき
夜部見た夢のつりなさよ
弐度ものに賺さりて
我か親にる人拝よて

国々さま〳〵めくりとも
我か親似る人拝まらぬ
夫から戻ひて本に来て
父ぐが筐（カタミ）は取りひるぎ
母くか手つかさ取並（ナミ）て
それ見て泪のよしまらぬ
なみたは袖にうしかくち
是程あさまし言のはよ
見るひと聞く人哀り知り
それ見て親の跡をとる

3　継親念仏

五ツの年に母戻き
七ツになたくと思出ち
国〳〵さま〳〵廻りとも
我か親にる人壱人をらぬ

苦（ハ）の大主か通る時
先まて大寿前物いらに
いやへたいま童の我身よしも
わかよしみよる別あらぬ
五ツの年に母戻き
七ツになたくと思出ち
国〳〵さま〳〵廻りとも
我か親似る人壱人をらぬ
頼て大寿前見してくいり
いやが親只にや拝らぬ
それからもとへて本につき
阿弥陀の七門の開時
管串（クダクシ）目からと拝まりる
管串沢山きりためて
あみたの七門によりかゝて
左の袖しやおしかくち

Hosei University Repository

右の袖しやおしわけて
管串目からと一目拝て
のかそ母親むまにまいる
のかすなし子やくまにきやる
わかくまきちやすや別あらぬ
頃る父ぐがとぢかまいて
ま、親へいらへのならぬしゆて
頼て母親一道なら
のかすなし子やあにいきくいる
いやちやうんなかごに立て置
折々時々廻てくは
茶水のはつ〳〵祭てくいり
蜻になて来て請取ひ
蝶になて来て請取ひ
蝶の廻らは親ともり
それから戻へて本につき

継親沖にしくらかめば
あくの段々よみはたち
我身の命のよしまらぬ

4　天神世界

此世の嶋がぎわ身ともて
あの世のひとに逃りやい
布茸屋形に持たれやい
野原の野山にあすばたへ
かやばの御墓によりかゝて
かや葉の御墓に飛くまて
御日の真昼間おくられて
むぶ嶋方覚忘りやい
後生よの道筋の餘多ある
阿弥陀の仏にたつねれば
つるぎの山路かゝるまで

汐の山路通ひたらぬ
天に照る三ツ星や
三ツ星五ツ星七ツふし
まんねの仏にわけらて
なかへたるに飛かゝて
まんねの仏のおそるしや
なかへからとばしゆる白雲や
白雲つれやい行りとも
てた城てたはんたに下りていく
おさねとりしち行れとも
かねのひゝきのきかれりん
むふ嶋生日嶋とまひていく
来るは七月中の十四日
瓜荻茄子や割の物
茗荷と九年母と飾り物
後生よのはんぢんすをる水

後生世の宝物めん粉よ
折しちあしよつ初の子は
汐の山路ふうよるへし
敷瓦はめて飛へし
むまから浜にうれていく
浜にうれやい浜なける
山おきやら寺にとひくまて
むねさら桜ん美さある
左のかた少御日に照る
右のかた少月のかう
照るてた照れて夢拝て
大和から下たる武しの釘
まくり水むふ水撫ちちやん
肝かねしやうんかね付て有る
いかなの人とも相性あり
いかなの人とも喧嘩する

Hosei University Repository

口事と寄才いことしゆらとめば
後世のなかやにか（かゝる）べし
是間物知り初子は
其程親の跡をとる

5　梅のたんき

梅のたんぎに花くらん
すゝぎがはんなるあのきしや
布はり御寺に送りて
くるふき山に捨りて
すておちられともわ身ひとり
ともらへ人数や御門迄
身肉や野原の土となる
身骨や岩やの石となる
朝さ夕さくたしよる墨（黒）かしら
月日にさるしゆる首ふねや
夏冬かけたるねべばかや
我が子は訕（ソシ）よる人をらば
胸に後生までかたき思ま
わか子はよすよる人をらば
胸に後生まて契りおま（き）
去年に咲く花ともはなし
今度に咲くはなとも開ち

6　あの経

親と子の中契りある
此世のわかりの契りなる
たんしやうの道には添はれらん
夫妻は後生まて契りある
あの経だいわの道列に
ともたち三世の契りなる
なにとの契りし親と子は

餘りの親のかなしきに
ひとりはやるまし思ひとも
無常よのつかへのせめ来りば
ひとり生れてひとりいく
ひとりはやるみの悲しさよ
泪を袖におしなかし
いかなる宝も捨ていく
身に添ふるものはかげ計り
先立（別人）とものはあみたなる
此世の定のなきらねば
老も若も定なし
いかなるひとにも行しめる（ゑあ）
此世にふたたひ戻さらね
みねから落よる滝の水
むすめて跡に戻すとも
わか親戻しゆる人はなし
餘りの親のかなしさよ
わかりもさま〳〵思のとも
親と別りのかなしたよ（き）
年や寄ていきよりとも忘らぬ

7　春咲花

春咲はるの花見れば
無常よかいか成風となる
無常よが色みて風見りば
色よし花も吹ちらす
千年もさかよる末代も
下葉は紅葉ぢて枯ていく
よしある花も咲はさけ
かりたる紅葉もちしはちり（ら）
定めて後生よのためとなる
さいや死すれは角をとる

Hosei University Repository

麒麟や死すれはつめをとる
かしくや死すれは皮をとる
ちばさや死すれは羽よとる
かたきと形見とかたきあり
人の形は残さらぬ
夕べの露や友まきよひ
朝の露や照た待ひ
夫も恋慕や時待ひ
人の命や叶(母)しらぬ
老も若も定なし
死すれば岩やにおくられて
朝さ夕さ照れる墨(黒)かみや
かうへい(は)月日にさるされる
骨はれんふが土となる
土（と）なりての其後は
野原の木草のむると成る

与所のためとのうつりきれ

8　ちやうしやの流

ちやうしやの流の七なかり
おひてのちやうしやのいと草や
金のはやしの七はやし
銀のおもての七表
後生よにひかれて面白や
おもての長者の糸草や
庭にかざひてうち見れば
牡丹や唐草松にふち
八重くさかわらぬ八重桜
水に浮草かとりくさ
大道方覚(角)さらめ(だ)なし
餘(餘)りの貧はかふにやくす
貧者が壱人まじ〳〵と

弐人の小児の子はひとり
その子は抱て鍬を持ちて
千里の野原にさまうれ出て
其の子は居せ置詠れは
うきへき方覚定なし
あの田の野原の穴(アナ)見れは
ひもん小松の三本有る
夫をば印に置ともて
其の子は居せ置あな堀(堀)(ほ)て
その子はおそなし者やれば
はくひと笑ひて父に向ふ
につくと笑ひて母にむかふ
それ見て泪はよしまらぬ
（泪は）袖におしなかし
堀(堀)ひたるあなの底見れば
こがねの手箱の拝れる

玉の手箱の拝れる
玉の金箱の面白や
其子は宝と生れたる
金の手箱はふりあけて
玉の手箱をふりあけて
よん手のかた手は箱持て
めん手のかた手は子は抱て
本の屋形に参(る)りかな
其の時つまが有様の
よひちに焦りてうけなわち
金手箱はあけ見ば
壱万貫のこかねある
玉の金箱あけ見れば
弐萬貫目の宝ある
壱萬貫めの金して
二人の親のあとを取る

Hosei University Repository

仏の浄土参るかな
弐万貫めの宝して
弐代続じ三代にちやうしやになる
此よて拝も人計

9 歌念仏

極楽は南の内にあるものを
　西と覚迷へなりけれ
極楽は左京のはしに渡る時
　わすれん者は親の事
我か親の位牌の前に昼寝して
　跡とひ〳〵と夢に見（る）
わか親の印の右のふきくよふ
　いつくの石の引さよす
あの坂を登る〳〵跡見ば
　急ん道の先の近さよ
乗り出ても心よるはな海小丹
　高瀬の波のたゝ（ぬ）りきり（は）
我か親の思ひてこせたるから衣
　着るたひもに泪出けり
鳥野辺にあらそふいぬのこゑ聞は
　我身を更におき所無し

10 親の御普提

あり程おそろしことの薬よ
さとらぬ計りのはがなさや
親の御普提とらん子は
池かわ堀わん水がなし
鉢すにはなすい花さかぬ
むるひた木草も枯ていく
植木もさせれはくぜめなし
ちわ地よくめは道わりる

わりひた地獄に落ていく
村よは拝まな先ちはてる
いつれも木草もめたる迄
なひかはそひめへふりそける
親のごぶたいとたる子は
池井堀わん水る出る
鉢すにはなすは花咲ひ
むるひた木草も花咲ひ
うひ木もさせれはくぜめさそ
ちわぢよくんめは道広く
踏めたるあしの下見りば
七万れんげのはな開ち
ひしへす花ば笠とめし
苔みし蓮げや手に持て
蓮んげの岫しき技をつきて
左京の橋から渡る時
阿弥陀の菩薩に手を挽り
地蔵よの仏に腰おさり
仏の降土に参りかな
是聞親の跡を取る

11 親念仏

餘りの親のかなしさよ
現か夢（か）まむるしか
ふたひの親の寝るよて
うぞみてさくれは親はなし
またもざん言ん給りるし
その時うけて歌よみは
うつゝか夢かまむるしか
親と声しち鬼よたれとも
後生よのさらめのせめくれは
（か）るしきや親と別りよひ

Hosei University Repository

わかりやさま〳〵思ひとも
親とわかりのかなしさよ
年やよゝりとも忘りらん

12 十時念仏

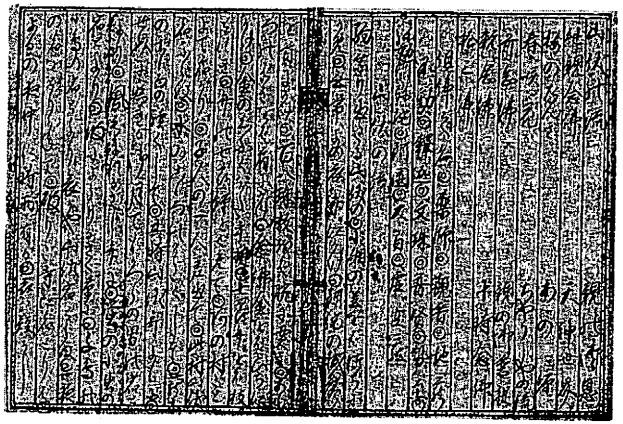
一 壱時ににひとゝり生れてひとりよく
一 弐時にわふたりの親のことはたゝ
今生後生迄忘りかたなさよ
一 三時には身（に）そふものはかげ計
いかたる（文）字も捨ていく
一 四時には母はいつまて此こゝろ
世界の果を見る人はなし
一 五時にはいつからいつ迄嘆きとも
人間さいていく人はなし
一 六時にはむさんの地獄も胸に有
降土に参るもわが心かな

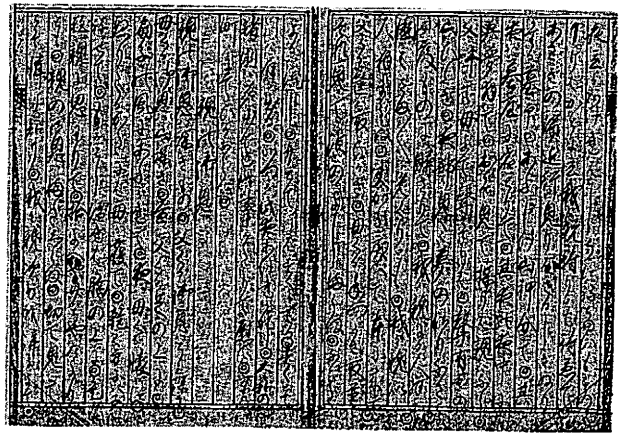
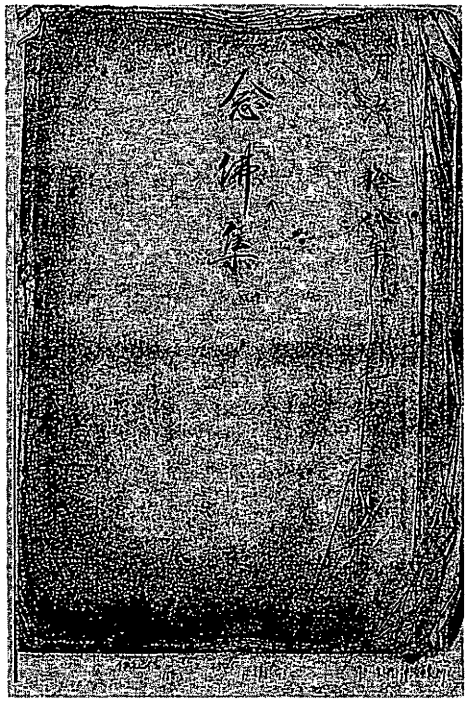
一 七時には何と契勢りし思ひとも
降土参りは道列もなし
一 八時には宿を定めん山路の
行衛も知らんわか心かな
一 九時には此世て人より勝りて
降土に参りはあみたの次と成
一 十時にはとひかし跡を取して
泪を流そ人のはかなさよ
あら波よ夕部の金のひゝきわ
聞くかす出りあら波よ
ふちやう寺の百八
ふんなふのきぢそよむ

13 拾三仏

壱へん申せは極薬降土のしをんの池のれんの花の壱方につほて一方にひらいてゑひのねがひうけさし給へ
宵は薬師夜中は観音、暁は地蔵、夜明ては弥動・不動・釈迦・文珠・普賢・勢至・阿弥陀・阿毘・大日・虚空蔵
右弐へん申せは極薬降土也　如斯十へん也

Hosei University Repository





379　伊礼本『念仏集』―解説と本文